

植 物 園 北 遺 跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

植 物 園 北 遺 跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび京都市立上賀茂児童館（仮称）新築工事に伴います植物園北遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

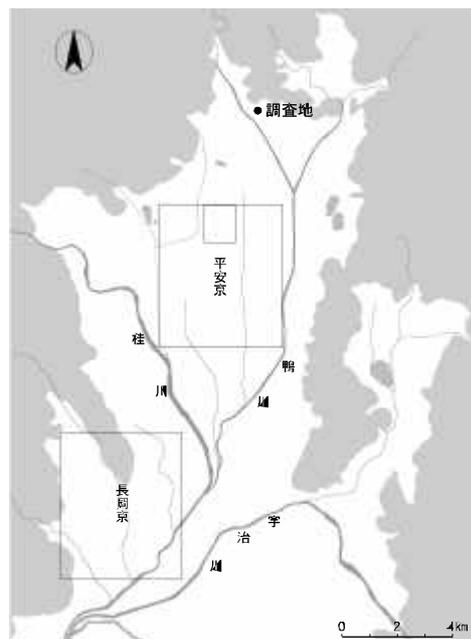
平成14年11月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 植物園北遺跡
- 2 調査所在地 北区上賀茂烏帽子ヶ垣内町24番地 京都市立上賀茂小学校
- 3 委託者及び承諾者 京都市 代表者 京都市長 梶本頼兼
- 4 調査期間 2002年7月15日～2002年8月30日
- 5 調査面積 約191m²
- 6 調査担当職員 鈴木廣司・津々池惣一
- 7 使用地図 図1は、京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「幡枝」「植物園」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前） 平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 遺構の種類ごとに1から番号を付した。
本書使用例 土壌1 建物1
- 13 遺物番号 挿図の土師器・須恵器の順に通し番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 作成担当職員 鈴木廣司・津々池惣一
- 16 執筆分担 2. 周辺の調査を津々池が、
他を鈴木が担当した。



(調査地点図)

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 周辺の調査	2
(1) 遺跡の立地	2
(2) 既往の調査	2
3 . 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 古墳時代の遺構	6
(3) 室町時代の遺構	9
(4) 江戸時代以後の遺構	10
4 . 遺 物	11
(1) 古墳時代の遺物	11
(2) 室町時代の遺物	15
5 . ま と め	16

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	調査前全景（北西から）
		2	調査状況
図版 2	遺構	1	第 1 面全景（東から）
		2	第 2 面全景（西から）
図版 3	遺構	1	第 2 面流路全景（北西から）
		2	第 2 面建物 1 全景（北西から）

挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1 : 2,500）	1
図 2	植物園北遺跡と既往の調査地（1 : 25,000）	3
図 3	植物園北遺跡航空写真	4

図4	第1面・第2面遺構平面図(1:200)	5
図5	建物1実測図(1:50)	6
図6	流路実測図(1:50)	8
図7	土壌3断面図(1:20)	9
図8	流路出土土器実測図(1:4)	12
図9	須恵器実測図(1:4)	14

表 目 次

表1	遺構概要表	10
表2	遺物概要表	14

植物園北遺跡

1. 調査経過

京都市北区上賀茂烏帽子ヶ垣内町24番地に所在する京都市立上賀茂小学校に、児童館が新設されることになった。同小学校は弥生時代から古墳時代の集落跡として知られている植物園北遺跡の北西部に位置しており、また中世に成立した上賀茂神社の社家町の範囲にも推定できる。そのため、平成4年(1992)には屋内運動場改築に伴って試掘調査が行われ、弥生時代から江戸時代の遺構を検出する成果を得た。試掘調査の成果を受けて、翌平成5年に当研究所が発掘調査を実施している。

平成5年度の発掘調査(以後、「第1次調査」と呼称する。)は、同小学校敷地西部に約798㎡の調査区を設定した。この調査では、古墳時代の竪穴住居跡・流路および平安時代後期の掘立柱建物・土壌等、中世・近世の遺構を検出するという成果を挙げることができた。今回対象となった児童館建設予定地でも同様の成果が十分予想できるため、発掘調査が実施されることとなった。

調査対象地は同小学校敷地南端部の運動場である。ブロック塀で道路と画されているが、道路および南側に隣接する烏帽子児童公園とは0.8m程の高低差があり、厚い盛土が予想できた。また、多数の立木があり、調査の妨げになるため伐採することとした。調査区は建設予定地に沿って南北約8m、東西約25mに設定した。なお、第1次調査地は今回の調査区から北西方向約80mに位置する。

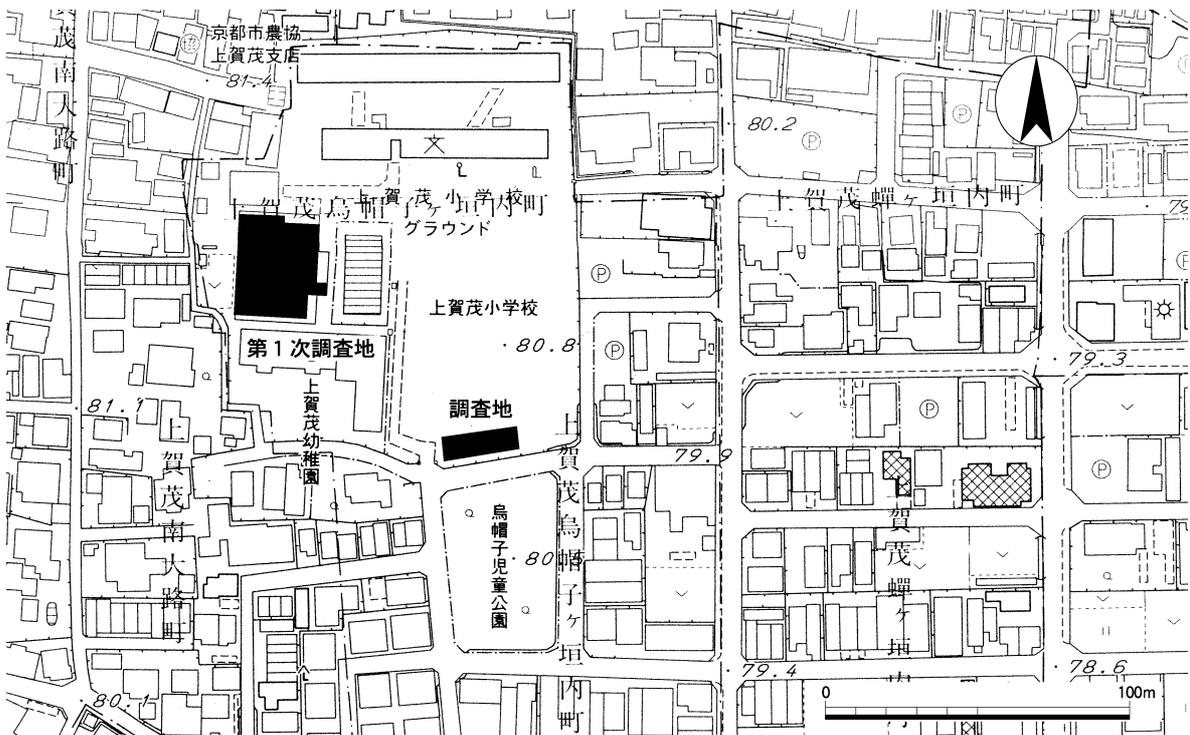


図1 調査位置図(1:2,500)

2 . 周辺の調査

(1) 遺跡の立地

調査地の属する植物園北遺跡¹⁾は、上賀茂神社付近から加茂川と同じような方向で南東方向に緩やかに傾斜する扇状地に広がる、縄文時代を一部含む弥生時代から古墳時代を中心とする、大規模な集落遺跡である。面積がおおよそ140万㎡の広大なものである。四至は東は宝ヶ池、狐坂の南方に位置する宝池自動車教習所付近から、西は加茂川東堤防付近まで、南は植物園の北半分と京都府立大学界限から、北は上賀茂神社と東に連なる神宮寺山、本山等の山麓付近までの範囲をさす。付近の山麓部一帯の歴史は古く、神宮寺山から東の本山にかけては、上賀茂本山遺跡²⁾で先土器時代のサヌカイト製の木葉形尖頭器の石器が発見されており、深泥池北側のケシ山遺跡³⁾ではナイフ形石器が発見されている。また、縄文時代の土器・石鏃等が出土し集落遺跡と推定されている上賀茂遺跡⁴⁾等もある。

また、遺跡の北西部には上賀茂神社がある。この神社を建立した賀茂氏と集落の遺跡は何らかの関係が想定される。「山城国風土記」逸文によれば奉斎する神は賀茂別雷神であるが、大和の葛木山に宿り、そこから山代国岡田の賀茂（相楽郡加茂町）に移ったという。さらに、木津川を北上して賀茂川上流へと到り、久我の国（北区紫竹の久我神社周辺）の北山基に鎮座したとされている。このような賀茂伝説にまつわる有力な豪族であった賀茂氏が大和からこの地域の統治者として君臨し、鴨県主になったとされている。

(2) 既往の調査 (図 2)

この地域は、昭和49年（1974）に京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会が実施した分布調査⁵⁾によって平安時代の遺物を採集したことから「遺物散布地」として遺跡認定されていた。その後、昭和53年（1978）より植物園北側一帯で公共下水道工事に伴う立会調査⁶⁾が開始された。その結果、古墳時代前期の竪穴住居が発見され、「植物園北遺跡」と呼称されるようになった。4年間の立会調査によって、縄文時代晩期から室町時代にかけての遺構が数多く検出された。今回の調査までに、植物園北遺跡として当研究所で18件の発掘調査を実施している。

縄文時代から弥生時代前期 縄文時代晩期の遺構としては、昭和61年（1986）の京都市高速鉄道烏丸線北進工事に伴う北山通での発掘調査⁷⁾（調査1）で甕棺墓と思われる埋甕が出土している。また、同様な埋甕を現在の京都市コンサートホールでの平成3年（1991）の発掘調査⁸⁾（調査2）でも検出している。なお、これまで検出されていなかった縄文時代中期の遺構が平成8年（1996）の立会調査⁹⁾（調査3）によって発見されたことにより、縄文時代晩期からの遺跡とされていた植物園北遺跡が、縄文時代中期まで遡ると考えられるようになった。弥生時代前期の遺構としては、調査1が唯一の遺構を検出している。

弥生時代後期から古墳時代前期 これまでの調査で、竪穴住居跡80棟以上の他、多数の掘立柱

建物、土壌、流路（溝）等の遺構を検出している。また、それに伴う遺物も多く出土しており、当遺跡のメインとなる時期である。

古墳時代後期から飛鳥時代 これまでの調査で、竪穴住居跡17棟の他、土壌や溝等を検出している。この時期の遺構は上賀茂小学校第1次調査およびその北側で平成元年（1989）に実施した発掘調査（調査4）¹⁰⁾ 京都市コンサートホール（調査2）¹¹⁾ の調査、北山通の北側の平成9年（1997）の立会調査（調査5）¹²⁾ およびノートルダム女子大学校内遺跡調査会が平成2年（1990）に実施した発掘調査（調査6）¹³⁾ 等で確認している。

奈良時代から平安時代 北山通とその付近の調査では、平安時代の遺物が多数出土している。また、柱穴も検出されているが明確な平安時代の遺構は確認できていなかった。平成9年（1997）に到って京都府立総合資料館近辺の発掘調査（調査7）¹⁴⁾ で平安時代の掘立柱建物を検出している。

前出の京都市コンサートホールでの調査でも、奈良時代の竪穴住居跡や平安時代前期の掘立柱建物等の遺構群を検出している。

平安時代後期から室町時代 平成2年（1990）のFM京都ビルの調査（調査8）¹⁵⁾ や上賀茂小学校第1次調査では平安時代後期の掘立柱建物を検出している。

また、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構は上賀茂小学校北側の調査（調査4）で社家町に

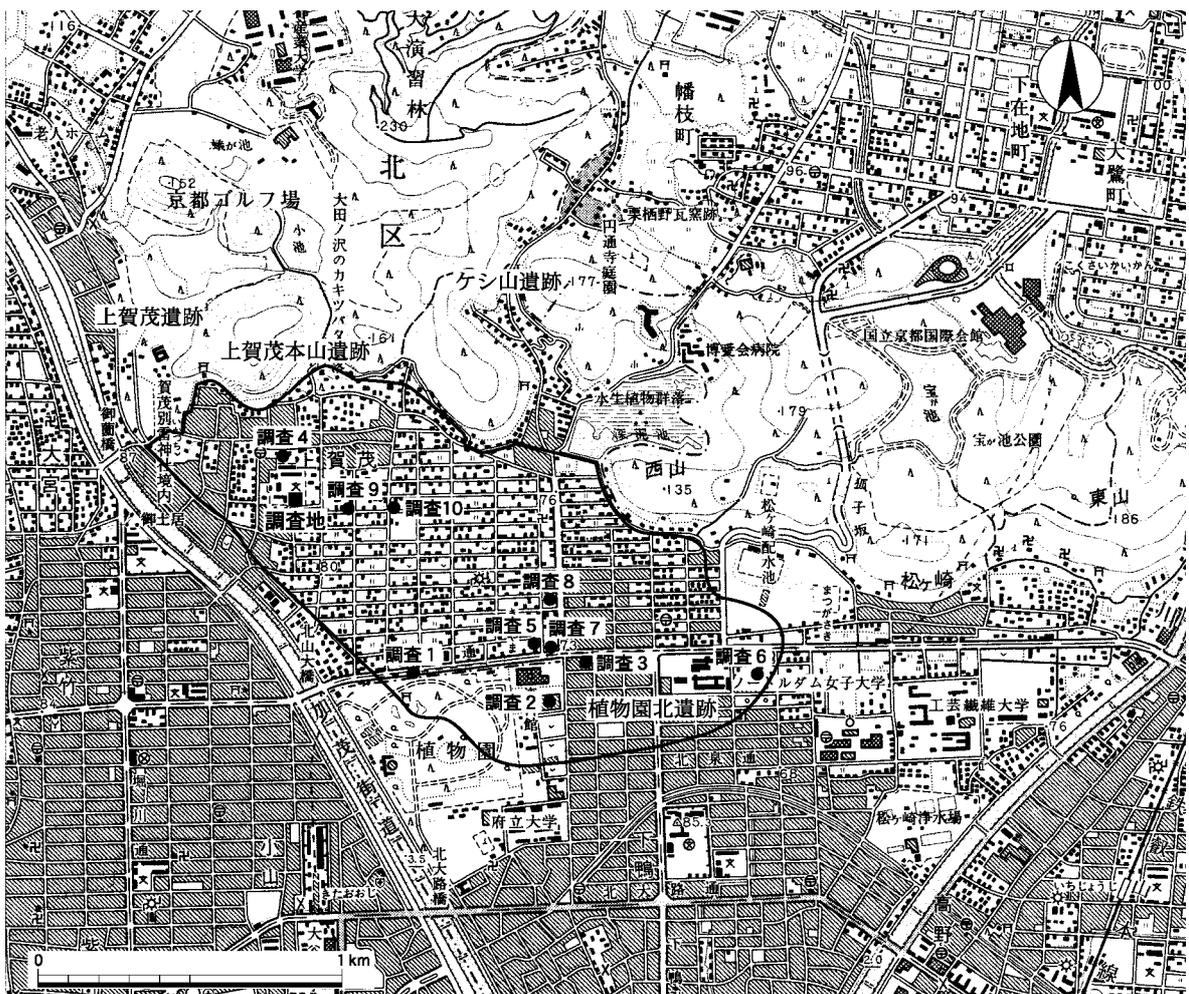


図2 植物園北遺跡と既往の調査地（1：25,000）

関連する「構」と思われる堀状遺構を検出している。このほか、この調査では井戸や柱穴群も検出しており、社家町に関する初めての遺構群である。

註

- 1) 『京都市遺跡地図』京都市文化市民局 1996年
- 2) 『京都の歴史 第1巻 平安の新京』学芸書林 1970年
- 3) 註2に同じ。
- 4) 坂東善平「京都市上賀茂縄文遺跡」『古代学研究』第41号 (財)古代学協会
- 5) 『平安京関係遺跡発掘調査概報』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1975年
- 6) 家崎孝治「下水道工事でわかった植物園北遺跡」『つちの中の京都』(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1996年
- 7) 「植物園北遺跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 8) 「植物園北遺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 9) 「植物園北遺跡(96RH224)」『京都市内遺跡立会調査概報』平成8年度 京都市文化市民局 1997年
- 10) 「植物園北遺跡1」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 11) 『植物園北遺跡発掘調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
- 12) 「植物園北遺跡(97RH202)」『京都市内遺跡立会調査概報』平成9年度 京都市文化市民局 1998年
- 13) 『ノートルダム女子大学構内遺跡発掘調査報告』ノートルダム女子大学 1991年
- 14) 「植物園北遺跡」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 15) 「植物園北遺跡」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年



図3 植物園北遺跡航空写真(南西から)

3. 遺構

(1) 基本層序

運動場整地時の砂層・盛土が厚さ0.9～1.0mを測り、次で厚さ0.05～0.1mの耕作土・床土層がみられる。直下が黄褐色を呈する砂泥層からなる遺構面である。なお、調査区北西部では拳大の礫を多量に含む、やや暗褐色がかった砂礫層が露呈している。この面ですべての遺構を検出したが、埋土に明瞭な差異を示す遺構群がみられるため、これらを2群に大別し、第1面・第2面として調査を実施した。遺構面の平均的な標高は79.8mである。最終的に断ち割りを行い、土層の観察を行った結果、黄褐色砂泥層は最も厚い部分では0.6mを測るものの、共に遺構面を形成する暗褐色砂礫層上に堆積することを確認した。

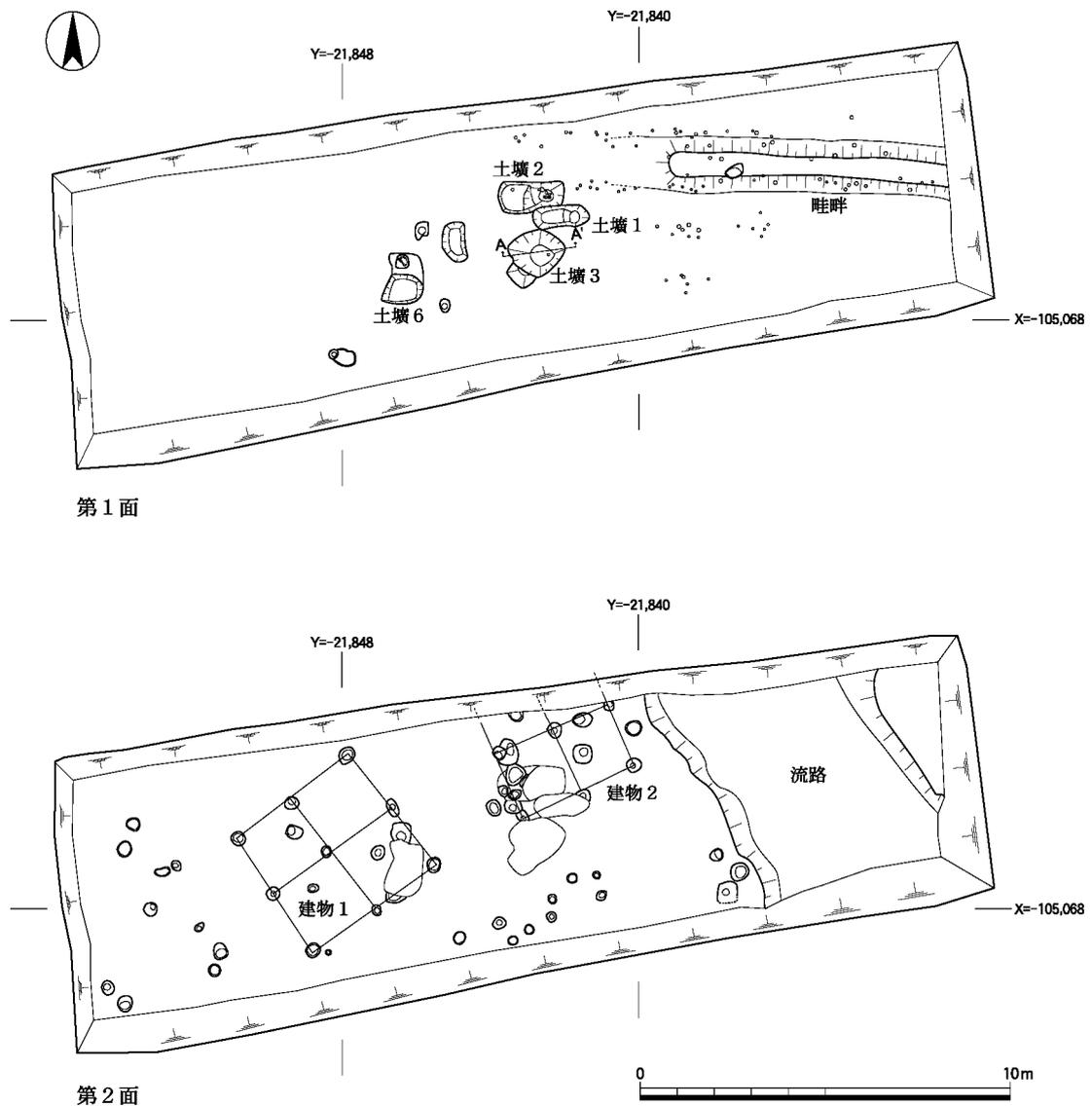


図4 遺構平面図(1:200)

(2) 古墳時代の遺構

調査区の東半部で自然流路、流路の西岸部で掘立柱建物 2 棟を検出した。柱穴は多数検出したが、建物としてまとめられたのはこの 2 棟のみである。第 2 面の調査に相当する。

掘立柱建物

建物 1 (図 5) 2 間 × 2 間の総柱建物である。N37°W 前後の傾きを持つ。規模は、西辺が約 3.72m、東辺が約 3.82m、北辺が約 3.78m、南辺が約 4.10m を測り、平面形が台形をなしている。したがって、柱間もばらつきが大きく短いものは 1.75m、長いもので 2.05m を測るなど一定しない。また、柱筋に柱当りが位置しない柱穴もみられる。柱穴は、おおむね円形を呈し、検出面で直径 0.3~0.4m、深さ 0.1~0.2m を測る。柱穴の埋土は、黒褐色ないしは暗褐色を呈するよく締まった砂泥層である。北端の柱穴は砂礫層を掘り込んで作られている。

建物 2 2 間 × 1 間分を検出した。北側へもう 1 間延び、建物 1 と同様の総柱建物となる可能性がある。敷地占有の都合上、重機掘削の際の残土置き場を調査区の北側に設定したため、確認

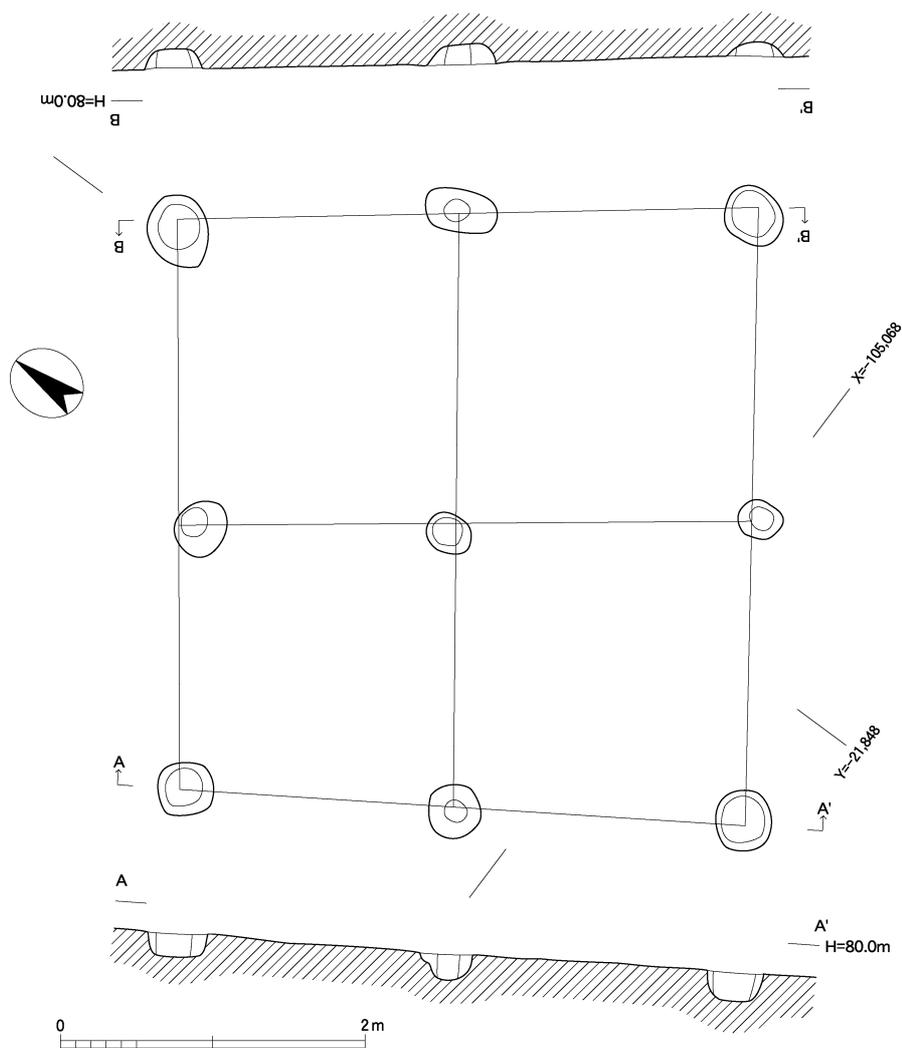


図 5 建物 1 実測図 (1 : 50)

に至らなかった。N22°W前後の傾きを持つものと考えられ、方向は建物1とは一致しない。規模は、南辺は3.3mで、柱間が1.75mと1.55mを測る。また、西・東辺共に柱間は1.8mを測る。建物1同様方形を成さないものと推定できる。柱穴は、おおむね円形で、検出面で直径0.3～0.4m、深さ0.15～0.25mを測る。柱穴の埋土は、黒褐色ないしは暗褐色を呈するよく締まった砂泥層である。

植物園北遺跡では、これまでに古墳時代前期の竪穴住居跡は多数検出されているが、掘立柱建物の検出例が少なく現状では京都市埋蔵文化財調査センターが平成6年(1994)に実施した試掘調査²⁾で確認した例があるのみである。この調査で検出した建物は、今回の調査で検出した建物1に類似した傾きをもつ2間×2間の方形の掘立柱建物である。建物の中央部に柱穴が認められず総柱建物ではない。規模は、東西辺が3.2m、南北辺が3.0mを測る。柱穴も直径0.3m前後、深さ0.3～0.4mの大きさと報告されている。

自然流路(図6)

調査区の東半部で、幅約5.0mの自然流路を、長さ約5.5m分検出した。北西から南東に流れており、西肩部の中位では、肩口に沿って大小の石が積み重なりテラス状を呈している。北壁面で確認した遺構面からの深さは約0.85mを測る。南壁に至るまでに0.2m程の比高差がある。

流路内の堆積土は5層に大別できる。

第1層 にぶい黄橙色砂泥層で、厚さは0.1mに満たない。流路が完全に埋没した後に、一時的に形成された浅い水路乃至は凹部に堆積したものである。第1層から須恵器壺(図9-1)などが出土している。

第2層 にぶい黄褐色砂泥層で、流路全面を覆っている。わずかに礫を含むものの、ほぼ均一の土質・色調を呈する。流路中程で厚さ約0.5mを測る。第2層は、布留式併行期の土器を主として包含している。

第3層 西肩部に沿って並ぶ、拳大から人頭大の多量に石を含むテラス状部を第3層とした。構築物である可能性を考慮に入れて調査を進めたが、石の配置・組方等の状況に規則性・法則性は認められないことから、意図的な構築物の可能性は薄いと判断した。第3層は、間層のほとんど礫を含まない砂泥層を境に、石の堆積状況が異なるため、上・下層に2分できる。上層がにぶい黄褐色泥土混礫層で大きな石は上層に多い。下層は暗褐色泥砂混礫層で、礫の密度は上層より濃い。上・下層とも庄内式併行期の土器が出土した。

第4層 暗褐色から黒褐色を呈するよく締まった砂礫層で拳大の石を若干含む。第4層は一時期流路の東肩であったものと考えている。遺構面の黄褐色砂泥層を西肩部より約0.25m低い位置で認めた。同層上には、第2層が東へ展開しており中洲状を成す可能性も考慮に入りたい。

第5層 暗褐色砂礫層および黒褐色砂礫層が、砂層を交えながら互層を成しており、流路が少しずつ位置を変えながら埋まっていった状況が窺える。また、第5層の最下部から、弥生土器が数片出土している。

第1次調査において調査区北東部で検出した流路は、北西から南東にかけての方向に流れ、そ

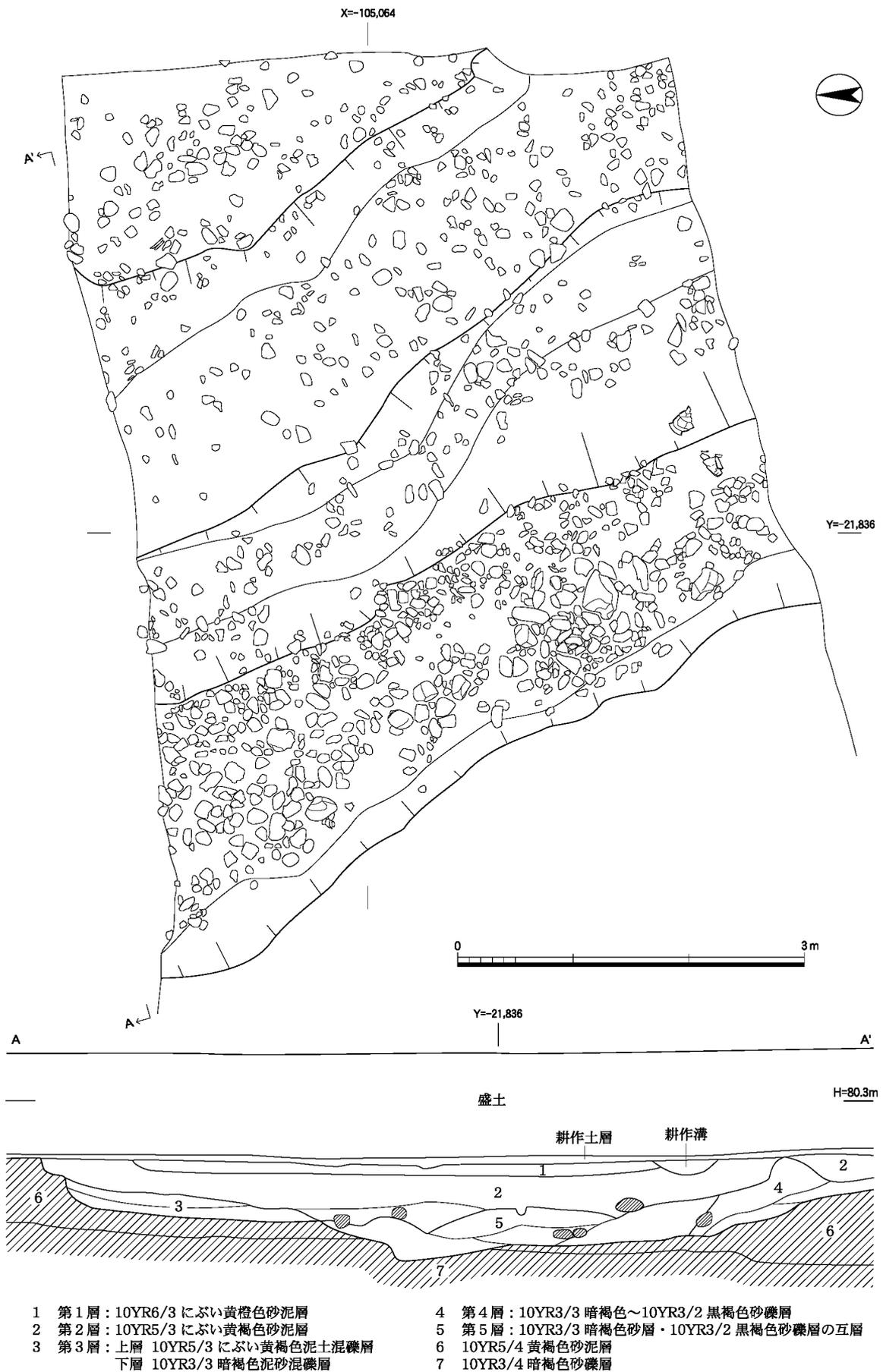


図6 流路実測図(1:50)

の規模は幅 5 m 以上、深さ 0.9 m を測る。埋土は 3 層に大別でき、弥生時代から古墳時代にかけての遺物を包含していると報告されている³⁾。今回検出の流路もほぼ同様で、傾きを同一とし、堆積状況および出土する遺物の年代も類似している。両者の傾きを抛り所として地図上で検討を行うとほぼ一線に繋がりに、同じ流路であると考えられる。第 1 次調査での遺構面平均標高は 80.7 m で、本調査の遺構面平均標高は 79.8 m であることから、流路は約 80 m 南東に流れて 0.9 m 下がることになり、比較的緩やかな流れであったことが想像できよう。

(3) 室町時代の遺構

調査区の中程で、土壌を 7 基、柱穴を 4 基検出した。検出遺構の一部にのみふれる。なお、室町時代の遺構、江戸時代以後の遺構を第 1 面として調査した。

土壌 1 東西方向に軸を持ち、ほぼ隅丸長方形の平面形をなす。規模は、長さ約 1.55 m、幅約 0.6 m、深さ 0.1 ~ 0.4 m を測る。南北の断面形は逆台形である。堆積土は 2 層に分れ、上層が暗褐色泥砂層、下層は灰黄褐色泥砂混礫層である。

土壌 2 東西方向に軸を持つ、ほぼ長方形の平面形を成す。規模は長さ約 1.8 m、幅約 0.8 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m を測る。南北の断面形は逆台形である。堆積土は 2 層に分れ、上層が暗褐色泥砂層、下層は灰黄褐色泥砂混礫層である。

土壌 1・2 は隣接しており、いずれも東半部の底部が深く掘られている。遺構検出の段階では土壌 1 が新しいものと判断したが、出土遺物に時期差はほとんどない。

土壌 3 (図 7) ほぼ隅丸方形の平面形をなし、規模は各辺共に約 1.25 m × 1.25 m、深さは約 0.35 m を測る。図中の 1 層の暗褐色泥砂層はやや締まりに欠けた軟泥質の土層である。第 1 面で検出した 7 基の土壌の上層部はすべて同様の埋土である。

土壌 6 ほぼ隅丸方形の平面形をなし、規模は各辺が約 0.6 ~ 0.75 m、深さは約 0.2 m を測る。断面形は肩口のなだらかな皿状をなす。堆積土は 2 層に分れ、上層が暗褐色泥砂層、下層は灰黄褐色砂泥層である。

これらの土壌から出土する遺物は、いずれも小片の土師器がほとんどを占めるが、瓦器・須恵器系陶器・焼締陶器・輸入陶磁器なども出土している。また、平安時代の遺構は認めることができなかったが、これらの土壌から土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器等が出土して

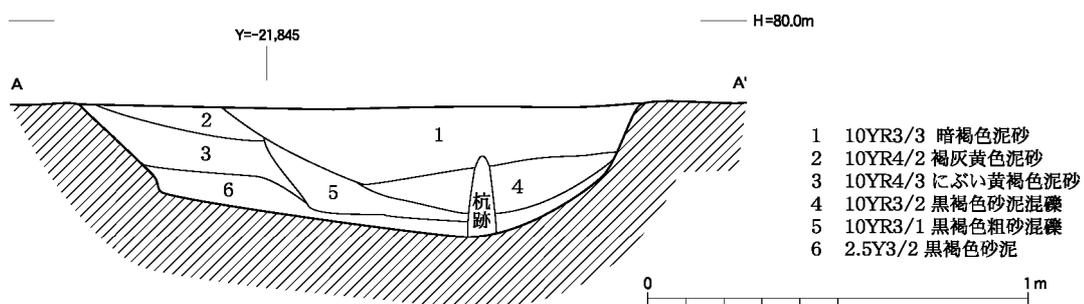


図 7 土壌 3 断面図 (1 : 20)

いる。このほか、古墳時代の土師器・須恵器も若干量が混入していた。

表1 遺構概要表

時 期	遺 構
古墳時代	掘立柱建物、流路、柱穴
室町時代中頃	土壇、柱穴
江戸時代以降	畦畔、杭跡

(4) 江戸時代以後の遺構

耕作に伴う畦畔および多数の杭穴を検出した。

畦畔 ほぼ真東西方向の傾きを持つ畦畔の一部である。畦畔は極く堅牢に造られており、灰黄褐色を成す部分やにぶい黄褐色を呈する部分等複数の色合いがみられることから、耕作土を幾度も貼り付け、叩き締めたものと考えられる。畦畔の断面形状はカマボコ形をなし、基底部では幅約1.4m、高さは最も残りの良いところでは0.2mを測る。本来は深田であったと近郊の古老の方に伺ったが、現状の耕作土が非常に薄いこと、遺構面にバック・ホ - の爪痕がいくつか残っていることなどから、運動場施設時に耕作土を除去したものであろう。なお、畦畔は古墳時代の流路の上面にのみ遺存している。おそらく流路の堆積土が軟弱であるため畦畔が沈下したものであろう。畦畔の両側には直径5～15cm程の杭穴が多数みられた。

畦畔・杭穴および耕作土層から、若干量の土師器・焼締陶器・京焼等の施釉陶器・染付、棧瓦が出土しているが当地周辺の耕作地としての初現を求める資料とはなり難い。

註

- 1) 実際には真西ではなくほぼ南西に面を持っているが、便宜上ここでは単純に「西」と呼称する。各辺とも同様に扱う。建物2もこれに準ずる。
- 2) 「植物園北遺跡 64」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成6年度 京都市文化観光局 1995年
- 3) 「植物園北遺跡1」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

4 . 遺 物

今回の調査では、遺物整理箱 8 箱の土器類が出土している。これらの大部分は調査区東端部で検出した流路から出土したものである。流路出土の土器類は、全体として遺存状況が不良で、磨滅の進んでいるものが多く、またほとんどが破片である。これらのうち、観察可能なものを図 8 に示した。図の 1 ~ 7 は庄内式併行期の土器、8 ~ 12 は布留式併行期の土器である。

(1) 古墳時代の遺物

流路出土土器

1 は小型器台である。棒状工具で中空とした脚部から、内湾気味に開き、丸みを帯びつつも軽く上方につまみあげられる端部を持つ受部と、直線的に緩やかに開き、端部に至ってやや外方に張り出す裾部を連続して成形したものである。脚部中程に円形の透し孔を 3 箇所穿つ。受部・裾部の端部をナデ、受部内外面・裾部外面を横方向のヘラミガキ、脚部を縦方向のヘラミガキ、裾脚部内面には横方向の粗いハケを施す。にぶい橙色を呈し、若干砂を含むが緻密な胎土である。受部径 10.4cm、裾部径 12.4cm、高さ 8.8cm。流路西肩部第 3 層上層出土。

2 の高杯は、裾部に向かって肥厚するやや短い穿孔のない脚部と、裾部の一部が遺存する。裾脚部外面は横方向の密なヘラミガキを施す。にぶい橙色を呈し、緻密な胎土である。最大部径 4.6cm、残存高 7.0cm。流路西肩部第 3 層出土。

3 は手焙り形土器で、実測を行ったのはフ - ド部分の破片である。受口の鉢にフ - ド部を接合したものとみられる。鉢頸部に刺突文が巡り、フ - ド部には格子状の文様帯が施される。文様帯は少なくとも 2 条は有するものと思われる。内外面共にナデによる調整を施したものであろう。にぶい橙色を呈し、若干砂を含むが緻密な胎土である。水垂遺跡出土品を参考に復元を行った。口径 18.0cm、復元高 18.0 ~ 18.5cm。流路中央部第 5 層出土。

4 は甕の口縁部である。口縁部は外上方に大きく屈曲し、端部に至って肥厚し上方につまみ上げられる。口縁部内外面をナデ、体部外面は平行条線のタタキ、頸部にハケを施す。にぶい橙色を呈し、砂をかなり含むやや粗めの胎土である。口径 16.0cm、残存高 3.0cm。流路西肩部第 3 層出土。

5 は甕の口縁部である。鋭く屈曲する頸部から口縁部は「く」の字状に開き、端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面をナデ調整、体部外面に平行条線のタタキを施す。灰黄褐色を呈し、やや砂を含むが密な胎土である。形状、胎土に角閃石を含むことなど河内産とみられる。口径 18.3cm、残存高 5.3cm。流路西肩部第 3 層下層出土。

6 は甕の体部上半から口縁部にかけての部分である。あまり張りのない肩部と、口縁部は外上方に外反し中程でさらに外方に屈曲する。端部はやや肥厚気味に丸く収める。口縁部内外面をナデ、体部外面に粗い平行条線のタタキを施す。体部内面は頸部付近を横方向のハケ、他を縦方向のほとんどハケ目の残らないハケで調整を施す。浅黄橙色を呈し、砂をかなり含むものの緻密な

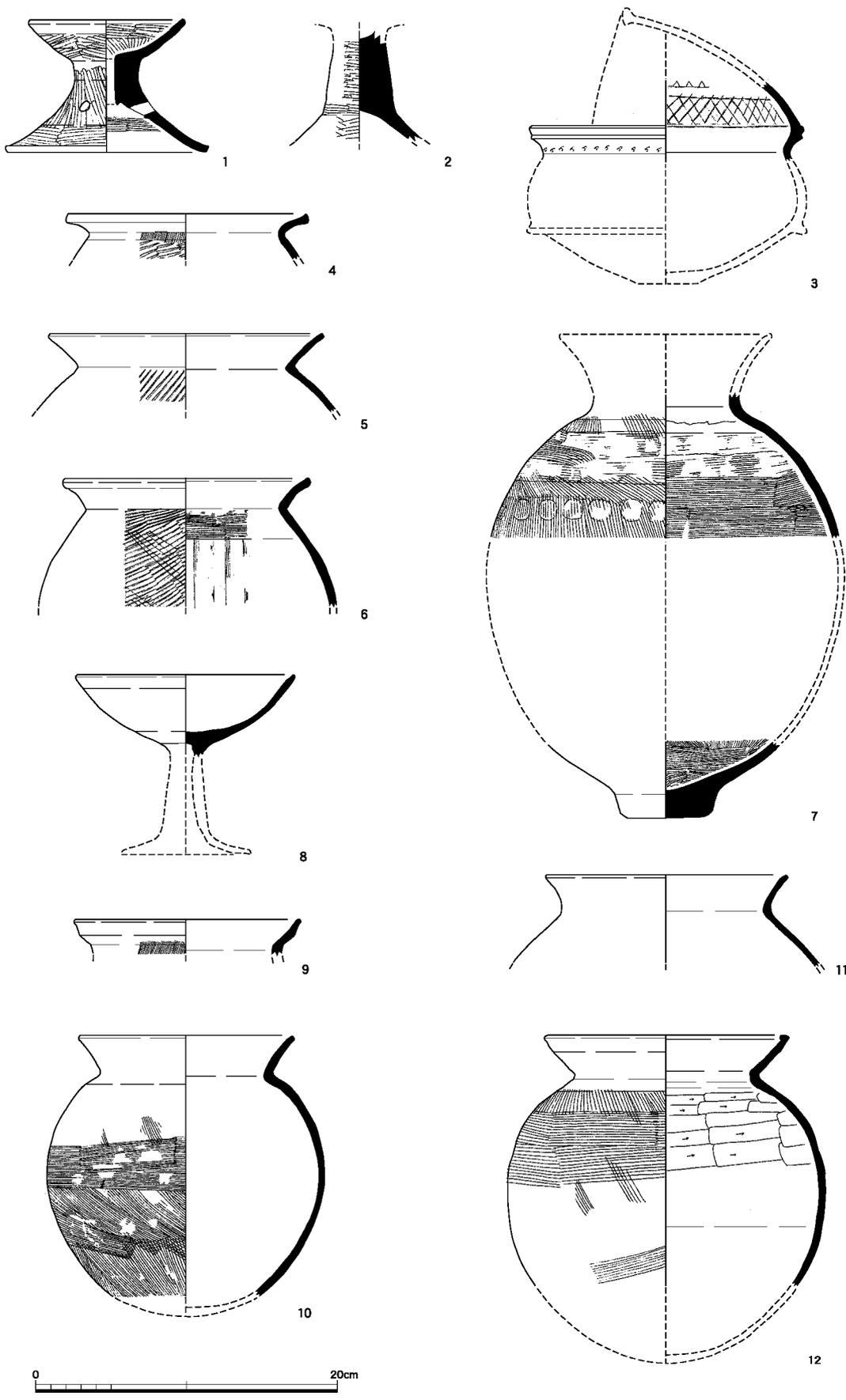


图8 流路出土土器实测图(1:4)

胎土である。口径16.4cm。残存高8.5cm。流路西肩部第3層上層出土。

7は壺の体部上半部と底部である。丸みを帯びた肩部と、平底から卵形の胴部を持つものとして復元した。外面は頸部を斜方向のハケ、肩部上位に横方向のハケを施すが、ハケ目はあまり観察できない。肩部下位は斜方向のハケを施すが、粘土板接合時に生じた指頭痕を掻き消すに至っていない。底部外面はヘラケズリ、底部片上半に一部ハケがみられる。内面は肩部が横方向のハケ、底部は横方向のハケが主体であるが一部縦方向のハケ目が残る。にぶい橙色から灰褐色を呈し、若干砂を含むが緻密である。最大径部25.0cm、復元高32.4cm。流路西肩部第3層出土。

8は高杯の杯部である。内湾する体部が開き気味に端部に至る。端部は丸く収める。円筒状の脚部が付くものと思われる。口縁部はナデを施すとみられるが、器表が荒れており仔細な観察はなしえていない。浅黄橙色を呈し、砂を若干含みやや緻密さに欠ける胎土である。口径14.5cm、残存高5.4cm。流路第2層出土。

9は受口形の甕の口縁部である。外上方へ開く口縁部が中程で小さく屈曲する。端部は丸く収める。口縁部内外面はナデ、体部外面にハケを施す。近江産と思われる。にぶい橙色を呈し、砂を多量に含むやや粗めの胎土である。口径15.0cm、残存高3.3cm。流路西肩部第2層出土。

10は甕で底部を欠失する。球形に近い胴部を持つ。口縁部は外反気味に外上方に立ち上がり、端部は上方に軽くつまみ上げられる。口縁部内外面はナデ、体部外面は中程に横方向のハケ、下半部に斜方向のハケを施している。下半部および体部内面は器表の剥離が著しく観察できなかった。浅黄橙色を呈し、砂をかなり含むが密な胎土である。口径14.4cm、残存高17.3cm。流路西肩部の第2層と第3層の礫層との境目付近から出土。

11は甕の肩部から口縁部である。あまり張りのない肩部から、口縁部は外反気味に外上方に立ち上がり、端部は丸く収める。全体に磨滅が進んでおり調整法等は不明である。にぶい黄橙色を呈し、砂をかなり含むが密な胎土である。口径16.0cm、残存高6.1cm。流路中程の第2層出土。

12は甕で底部を欠失する。球形に近い胴部を持つ。口縁部は内湾気味に開き、端部に至って内方に突出する。口縁部内外面はナデ、体部外面は頸部付近に斜方向のハケ、肩部に横方向のハケを施している。下半部は器表が剥離気味であるが斜方向のハケとみられる。体部内面は上半部が横方向のヘラケズリ、下半部は器表が剥離気味であるため明確ではないがヘラケズリとみられる。明赤褐色を呈し、砂をかなり含むが密な胎土である。口径16.3cm、残存高16.7cm。流路中程の第2層出土。

庄内式併行期の土器は、前半から中頃に位置すると考えられる3の手焙り形土器、中頃に位置すると考えられる7の壺、中頃から後半に位置すると考えられる1の器台までみることができる。また布留式併行期の土器は、前半に位置するとみられる10・12の甕、中頃から後半に位置すると考えられる8の高杯までみることができる。このことから、流路の存続した時代を、これらの庄内式併行期の土器・布留式併行期の土器によって傍証することが可能である。なお、流路第5層とした砂礫層から、数片の第 様式とみられる弥生土器が出土している。第1次調査で検出した流路からも、同様に弥生土器が出土していることから、流路の初現に関わるものといえよう。

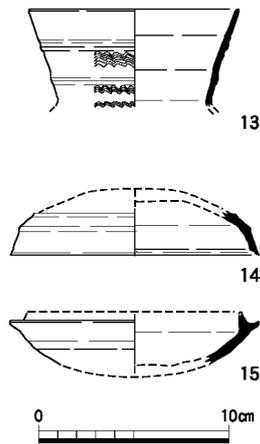


図9 須恵器実測図(1:4)

出土層序をそれぞれの末尾に付した(図7下 流路断面図参照)。1~7の庄内式併行期の土器は、流路の大小の石を包含する第3層(1・2・4~7) および砂礫と砂の互層からなる第5層(3)から出土している。一方、布留式併行期の土器はそれらの上層である第2層のみから出土している。これにより、第3層が布留式併行期の土器以前に成立したことの根拠としている。

流路第1層およびその他出土の須恵器

須恵器は、古墳時代および平安時代のものを合わせて20点が出土した。そのうち図化可能な3点を図9に示した。

13は須恵器の壺の口縁部である。口縁部は外上方へほぼ直線的に開き、端部は丸く収める。2条の凸帯と波状文が施される。内外面共にナデ。灰色を呈し、緻密な胎土である。口径11.2cm、残存高5.1cm。流路第1層から出土。

14は須恵器の杯蓋である。天井部と口縁部の境の稜線がかすかに認められる。口縁部内外面共にナデ、天井部外面にやや丁寧さを欠くヘラケズリを施す。口径13.0cm、残存高2.4cm。第1面の土壌2から出土。

15は須恵器の杯身である。受部を持つが、立ち上がりやや低くなっている。口縁部内外面・体部内面をナデ、体部中程から底部にかけてやや丁寧さを欠くヘラケズリを施す。口径13.0cm、残存高2.8cm。第1面の土壌2から出土。

13の壺・14の杯蓋は須恵器の編年ではTK23~TK47に位置するものと考えられる。15の杯身はTK217に位置するものであろう。古墳時代後期の遺物は第1次調査でも出土しており、また、同校北側の調査³⁾では竪穴住居跡を検出している。今回の調査区内では確認できなかったものの古墳時代後期の遺構は普遍的に存在する可能性が高い。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代後期	弥生式土器(第V様式)	0箱		(6点)	0箱
古墳時代前期 ~中期	庄内式土器・布留式土器	5箱	庄内式土器7点、 布留式土器5点	4箱	0箱
古墳時代後期	土師器・須恵器	1箱	須恵器3点	1箱	0箱
平安時代	土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器 ・緑釉陶器	0箱		(11点)	0箱
室町時代中期 ~後期	土師器・瓦器・須恵器系陶器・焼締陶器 ・輸入陶磁器	1箱		1箱	0箱
江戸時代後期	土師器・焼締陶器・染付・施釉陶器・ 棧瓦	1箱		0箱	1箱
計		8箱	15点(1箱)	6箱	1箱

(2) 室町時代の遺物

このほかには、わずかながら室町時代の遺物がある。大部分が土壙群から出土したもので、細片であるため図化できない。

概略は、土師器には赤色系と白色系の2種が確実に存在すること。これらの土師器の皿・へそ皿等の口縁部は⁴⁾ 期頃とみられる特徴を有するものがみられること。また、瓦器の鍋釜類の口縁部に室町時代中頃とみられるものがあることなど、遺物に時期差が認められないことから、これらの土壙群は15世紀中頃から後半のある時に、一気に造られたものと考えられる。

註

- 1) 『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊 1998年
- 2) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- 3) 『植物園北遺跡発掘調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
- 4) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

参考文献

- 石野博信ほか『古墳時代の研究 第6巻土師器と須恵器』雄山閣 1991年
佐原 真・金関 恕『弥生文化の研究 第4巻弥生土器』雄山閣 1987年
大川 清ほか『日本土器辞典』雄山閣 1996年

5.まとめ

流路出土遺物の検討から、この流路は弥生時代の終わり頃には確実に存在し、5世紀の中頃には埋没していることがわかった。また、流路第1層出土の須恵器から5世紀末頃にも流路が一時的に機能していた可能性もでてきた。この成果から、流路周辺は遅くとも弥生時代の終わり頃には人々の生活の場となり始めていたものと成り得ないだろうか。

上賀茂小学校周辺の調査では、平成元年（1989）に小学校北側の隣接地で実施した発掘調査¹⁾（調査4）で、上賀茂神社社家に関する遺構を検出すると共に、古墳時代前期および後期の竪穴住居跡を10棟検出している。また、ほぼ真西にあたる2箇所の調査でも古墳時代の遺構を検出している。昭和59年（1984）の発掘調査²⁾（調査9）では、古墳時代前期の竪穴住居跡2棟および弥生時代後期の竪穴住居跡2棟を、平成12年（2000）の発掘調査（調査10）でも、古墳時代中期の竪穴住居跡2棟および縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物を包含する流路の一部と思われる遺構を検出している。これらの成果は、同校周辺が濃密な遺構分布を示すと予想するに十分である。

今回の調査でも、周辺の調査同様古墳時代の前期から後期にわたる遺物を採集しており、今回検出した遺構は、これらの一連の遺構群に組み入れられるものと考えてよい。また、流路の傾きに沿うかのような2棟の小型の総柱建物は、簡易な倉庫であったと推定している。柱穴の配置・柱間隔などに計画性がみられないことから恒久的な施設ではなかったかも知れない。しかし、これらの建物は少なくとも集落の一端に位置づけられるものと考えられよう。

もう一点の調査目的であった、上賀茂神社社家町に関連する遺構は、時期的には室町時代の土壙群が該当している。しかし、平成元年度の調査に比べ遺物出土量の乏しさは比較にならない。また、平成元年度の調査4で「構」を検出していることなどから、この時期の調査地は既に社家町の中心から外れていた可能性も考えてよいだろう。

今回の成果により、上賀茂小学校々内は、生活の基幹となる川を挟んで両岸に古墳時代の集落が展開する可能性が高くなったと考えられる。

註

1) 『植物園北遺跡発掘調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年

2) 『植物園北遺跡発掘調査概報』昭和59年度 京都市文化観光局 1985年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	しよくぶつえんきたいせき							
書名	植物園北遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2002-14							
編集者名	鈴木廣司・津々池惣一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2002年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しよくぶつえんきたいせき 植物園北遺跡	きょうとしきたく 京都市北区 かみがもえぼし 上賀茂烏帽子 ががきうちょう ヶ垣内町24	26100		35度 03分 09秒	135度 43分 37秒	2002年7月 15日～2002 年8月30日	191㎡	児童館 新築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
植物園北遺跡	集落跡	弥生時代後期 ～古墳時代	建物・流路・柱穴	土師器・須恵器		1993年調査の流路 に連続する流路を 検出した。		
		室町時代中期 ～後期	土壇・柱穴	土師器・瓦器・須恵器 系陶器・焼締陶器・輸 入陶磁器				
		江戸時代以後	畦畔	土師器・陶器・磁器・ 棧瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-14

植物園北遺跡

発行日 2002年11月30日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961